盧構橋事件80周年平和連帯の旅

―天津・北京に参加して―

伊藤英世

中国を訪問するのは、今回で3回目。新潟市の新潟市教組の足立豊先生をはじめとする社会科の先生方とハルピンの731部隊の跡地や旧満州の瀋陽、長春、大連など（旅順の戦犯管理所や平頂山も）を訪問したのがはじめて。2回目は、南京虐殺記念館（侵華日軍南京大虐殺遇難同胞紀念館）や上海を映画評論家の故山田和夫さんとご一緒したことがあります。

今回なぜ中国旅行に参加したのか。きっかけは、2017年4月15日に五泉市で「山本宣治をしのぶ五泉のつどい」が開かれ、立命館高校の本庄豊先生の講演がありました。後援団体に「治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟新潟県本部」が入っていました。山本宣治（山宣）は昭和4年2月、虐殺される1週間前五泉にきていました。南部郷農民組合主催の演説会に弁士として招かれたものの、警官隊ともみ合いになり、演説会は中止。五泉駅前の「かじや旅館」で石田宥全の求めに揮毫した書「唯生唯戦」（ひたすら生き、ひたすら戦う）が絶筆として残されました。当時の南部郷農民組合は木崎争議（旧豊栄市）とならぶ大蒲原小作争議で有名でした。昭和8年には五泉無産診療所も開設されました。プロレタリア詩人の長沢佑（たすく）も有名です。彼は小林多喜二の死の3日前に23歳で亡くなっています。亡くなった2月17日は彼の誕生日でもあります。ネットの青空文庫でも読むことができます。また五泉は原菊枝の出身地でもあります。彼女の「女子党員獄中記」は発禁処分になりましたが、今ではネッ

トの国立国会図書館のコレクションで読むことができます。南部郷農民組合は台湾のキールンでなくなった渡辺政之輔の農民葬をやろうとしていたのを知った山宣がわざわざ京都の宇治から来たようです。

山宣のイベントの成功のため、実行委員として、チラシを配布したり、会合に出たりして、後援団体の治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟（以下国賠同盟）に入会しました。そして、たまたまネットで国賠同盟のホームページを見たら、10月16日から20日まで天津・北京に行く旅行があることを知りました。ちょうど今年２０１７年は盧溝橋事件80年にあたります。盧溝橋には一度行ってみたいと思い、迷ったあげく、行かれるときに行かないとあとで後悔すると思い、申し込みました。国賠同盟には国際部があり毎年海外に視察に行っています。去年は台湾、おととしは韓国だったそうです。国連の人権高等弁務官事務所のあるジュネーブにも行ったそうです。

富士国際旅行社がツアーの申し込み先でした。若い女性添乗員の山崎さんをいれ総勢24名になりました。大阪、愛知、東京、宮城などからの参加者でした。

成田を2時にたって大連経由で天津に行きました。大連の上空から林立する高層マンションをみて20年まえに比べて大きく発展しているのに驚きました。同じ飛行機に乗り継ぎをして天津には暗くなって19時20分到着。日本とは時差が1時間遅れます。

ホテル日航天津は繁華街のど真ん中。近くには伊勢丹デパートもあります。セブンイレブンもあり、５００ミリリットルの水が2元（36円くらい）でした。１００元札の紙幣を出したら、光にすかしたり、手で触ったり、偽札ではないかと疑り深く時間がかかりました。他の客はスマートフォンでＱＲコードみたいなのを出して決済していました。

翌日17日天津市内の在日殉難烈士・労工紀念館に行きました。高館長とあいさつを交わしました。そこには日本に強制連行され、亡くなった人たちの遺骨が埋葬されていました。花岡事件記念園もありました。この事件は鹿島との和解が成立しました。

一番印象的だったのは２００４年3月26日新潟地方裁判所で勝利した賠償裁判の記録がちゃんと展示されていたことです。私は１９９９年から張文彬さんの裁判を支援する中国人戦争被害者の要求を支える会新潟支部の一員としてたたかってきたからです。中国で強

制連行をされた人は天津に集められ、そして貨物船で日本に送られました。この次来るときはその場所の慰霊碑を見たいと思っています。

新潟の裁判で一番の印象は、当日すぐＢＢＣが勝利したニュースを報道したことです。新潟のような地方都市の裁判が世界に配信されるすごさにびっくりしました。世界はちゃんと見ているのだということ。こういう裁判は日本ではほとんどニュースにならないのです。裁判所は事実の認否は必ず認めるのです。強制連行、強制労働が起こったことは事実なのです。日本政府はそれを否定することはできないのです。

午後は静園と周恩来・鄧穎超（トウエイチョウ）記念館を見学しました。周恩来は天津の南海学校に在籍し、鄧穎超と結婚しました。夫人の業績を見て、公務員の夫人付を使って、森友学園と関係している日本の昭恵夫人に爪の垢でも煎じて飲んでほしいと思いました。天津は五大道というイギリスの租界地があり、西洋風の建物を見て回りました。また古文化街を見てまわり泥人形を見たりしました。

翌日18日は午前強制連行された方々との懇談がありました。驚いたことは、強制連行された人のなかには広島の西松で働き、原爆でガラスの破片が突き刺さった話をされた方がいたことです。ヒバクシャでもあったのです。その娘さんも同伴して来られたのですが、その方たちは被爆2世になるわけです。天津にきてヒバクシャのお話が聞けるとは思いませんでした。河北大学の劉宝辰教授から強制連行のレクチャーも受けました。

午後は北京に向かいました。思ったより渋滞がなく、夜は京劇を見に行ってきました。

19日は盧溝橋抗日戦争博物館に行きました。北京市内の中学1年生が見学に来ていました。盧溝橋はマルコポーロ橋とも言われています。

日本語のホームページがあります。安倍首相と習近平国家主席がベトナムで握手している写真が載っています。http://www.1937china.com

盧溝橋事件は１９３７年７月７日に起こりました。南京事件とともに今年は80周年です。

第一発の銃声は誰が撃ったのか。笠原十九司著「日中戦争全史」（高文研２０１７年）には次のように記載されています。上巻の２１０ページ。

なお、ＮＨＫ総合テレビ「歴史への招待―盧溝橋謎の銃声」（１９８１年４月18日）によれば、「第一発」は、

伝令の志村二等兵が方向を誤って、中国人陣地に近づいたために発砲されたのが真相であるという。また、午前3時25分頃の銃声は、豊台へ伝令に出された第八中隊の二人が盧溝橋に戻ったところ、中隊が移動して見当たらず、龍王廟付近を右往左往していたのを中国軍に射撃されたものであるという。

月のない闇夜に、永定河堤防に沿った中国軍陣地の数百メートル手前で、黎明の奇襲攻撃のための夜間軍事演習を展開したこと事態が無謀で挑発的な行動といえた。危機意識と敵対意識を抱いて、トーチカあるいは散兵壕で警戒にあたっていた中国兵が、暗闇のなかを陣地に接近してくる日本兵の影を認めれば、警告の意味もふくめて発砲するのは当然なことであった。牟田口連隊長と一木大隊長は、これを「不法射撃」とみなして中国軍を「膺懲」しようとして、攻撃を命令したのである。盧溝橋事件は起こるべくして起こったといえよう。牟田口はアジア太平洋戦争末期、インパール作戦を強行して、日本兵に大量の餓死、病死者を出すことになるが、血気にはやる牟田口や一木らの浅慮が、日中戦争を発火させたのである。

と、このように述べています。戦争に発火する〈前夜〉があり、それ以前の〈前史〉があります。鉄道爆破をした柳条湖事件やさらにそれ以前の21か条要求も前史です。笠原氏は世界12月号（２０１７年）で「現在の安倍政権が、戦後日本の平和主義の歩みを変質させるターニングポイントを作り出していることは明らかです。これが戦争が不可避となるような〈前夜〉の状況へと決定的に変質する前に、そして声があげられるうちに、歴史から学びながら声をあげていくことが大事ではないかと思います。」と述べている。

前夜になれば戦争はもう避けられない。現地の独断専行や偶発的な事件だけで戦争が起きてしまう。盧溝橋事件はまさに日中戦争の前夜だったのではないでしょうか。

２０１７年11月の今はまだ避けることができる。積極的に声をあげなければならないということを現地に行って、しっかりと感じることができました。世界遺産の故宮や胡同を見学したりし、次の日の20日、午前焦荘店地下道戦遺跡記念館を見学し、その後北京空港を発って、羽田空港に帰国しました。

（いとう ひでよ・所員）